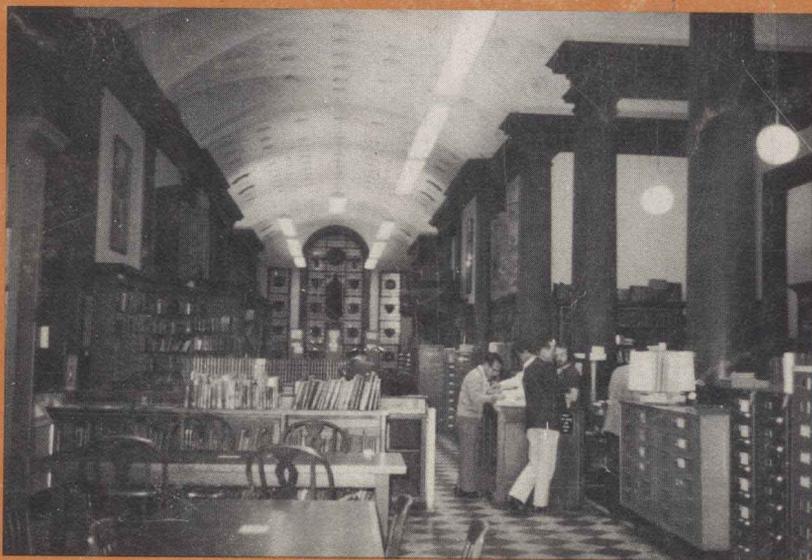


ア
メ
リ
カ



小図書館のシステム



アメリカ小図書館のシステム

報告・佐藤玲秀
滝沢義雄
鹿児島達雄
荒木英夫

1978

社団法人 日本図書館協会

目 次

- | | | |
|---|---|-----|
| 1 | 緑と林のなかのフェアファックス
郡立図書館システム
□佐藤玲秀 | 5 |
| 2 | バーソロミューカウンティ
ライブラリー
□滝沢義雄 | 49 |
| 3 | ロックフォード公共図書館と
北部イリノイ図書館システム
□鹿児島達雄 | 85 |
| 4 | ニューメキシコ州図書館システムと
メサ公共図書館
□荒木英夫 | 111 |
| 5 | ホイッティア公共図書館とメトロポリタン
協同図書館システム
□荒木英夫 | 137 |
-

----- 旅 行 日 程 -----

1976年10月

- 8日(金) 空港までJ L A叶沢事務局長，菅原総務部長が見送ってくださる。
18：15 東京発（実際の離陸は約30分遅れる），パン・アメリカン航空800便
18：00 ニューヨーク着
コロンビア大学の大滝氏が出迎えてくださる。
- 9日(土) 大滝氏の案内で，ニューヨーク公共図書館，メトロポリタン美術館，コロンビア大学図書館などを見学。大滝氏宅で夕食を御馳走になる。
- 10日(日) エンパイヤ・ステート・ビル，ウォール街などを見物。
一行4人，大滝氏のおかげで少しアメリカに馴れた感じ，感謝。
- 11日(月) 12：30 ニューヨーク発（ナショナル航空421便）
13：28 ワシントン着
通訳の和田さんの案内で，ホワイト・ハウス，ウォーターゲート等を見物。
- 12日(火) Fairfax County公共図書館見学。
昼食はKiwanis Clubのメンバーと会食。
午後は分館見学。
Reston Regional Lib
Carter Glass Lib
Patrick Henry Lib
- 13日(水) 午前中County Executiveを訪問。
分館2館見学。
George Mason Lib
Alexandria Lib
午後Kings Park Lib見学
- 14日(木) 午前中アメリカ議会図書館訪問。
- 東洋部長の常石氏，日本課長の黒田氏に今回の調査に対する御援助をお礼。
12：10 ワシントン発（トランス・ワールド航空427便）。
12：50 インディアナポリス着，Bartholomew County 図書館長スコー氏と，通訳の加茂夫人が出迎えてくださる。
午後クレオ・レジャー記念図書館見学（County Lib）。
夕食は館長，館の各チーフと会食。
9時頃まで館長と話合う。
- 15日(金) 記念図書館見学
午後はHope分館，ブック・モバイル活動を見学。
- 16日(土) 午前中は本館の見学。各部門の説明を受ける。
午後はコロンバス市内見物。
夜は館長宅に招かれ，家族と11時頃まで歓談。
- 17日(日) 12：15 インディアナポリス発（エア・インディア航空151便）
13：10 シカゴ着
ロックフォードのホテルにチェック・イン後，図書館理事宅で歓談
- 18日(月) 午前中Rockford公共図書館見学。
午後は3分館を見学。
Rock River Branch
Montague Lib Center
Rockton Center Branch
午後7時30分から10時まで図書館理事会傍聴。
- 19日(火) 午前中は本館で各種の説明。
Illinois Library Materials Processing Center見学。

- 午後、分館 2 館見学。
Edgebrock Branch
Highland Branch
- 20 日(水) 11 : 45 シカゴ発 (トランス・
ワールド航空 243 便)
13 : 35 アルバカーキ着。
- 21 日(木) Mesa 公共図書館長ステーンズラ
ンド氏と、通訳の西田氏に伴なわ
れて図書館へ。
途中、ニューメキシコ州立図書館
に立寄り見学。
午後はメサ図書館見学。
- 22 日(金) 午前中図書館見学。
昼食は図書館理事、館長、チーフ
と会食。
午後は周困の山地見物と原子力研
究所図書館を見学。
- 23 日(土) 12 : 15 アルバカーキ発 (テキ
サス・インタナショナル航空 857
便、実際は 1 時間遅れに離陸)
13 : 50 ロスアンゼルス着
空港にWhittier 公共図書館長のベ
イレスさんと、山中夫人が出迎え
てくださった。
図書館で、図書館理事、友の会、
館のチーフなどが歓迎会。
- 24 日(日) 休日
ロスアンゼルス図書館の浅和氏の
案内で、ハリウッド、海岸などを
見物。
- 25 日(月) 午前中、分館の友の会の会議を傍
聴。
昼食は館長、チーフと一諸にレス
トランで会食。
午後はWhittwood Branchを見学。
- 26 日(火) 本館見学。
夜、館長と通訳してくださった宮
杜さんをレストランに招待。
一同正式調査が終ってほっと一息。
- 27 日(水) 10 : 30 ロスアンゼルス発 (予
定はコンチネンタル航空 607 便だっ
たが、ストライキ中だったので、
前日に日本航空 061 便に変更)
12 : 30 ホノルル着
午後は市内見物。
- 28 日(木) 休養日
それぞれ海岸、土産物店などを散
索。
- 29 日(金) 14 : 15 ホノルル発 (日本航空
061 便)
- 30 日(土) 17 : 15 東京着

緑と林のなかのシステム

—フェアファックス郡立図書館システム—

佐藤玲秀

1. フェアファックスへの旅路で

私にとって、今回の渡米は、初めての海外旅行でもあった。英会話の不通に心を痛め、生活習慣の相違を思い、調査のあれこれ考えたなら、誰だって緊張するにちがいない。それに、友人や縁者の善意に満ちた恐迫言質が、耳元にのこっているから、足が地につくわけがない。しかも、乗物とはいえば、私がこの世で最も恐れている飛行機ときているから、ことは決定的である。古人が語る、喜々とした旅立ちの心象世界なんて、味わういとまなどありはしない。

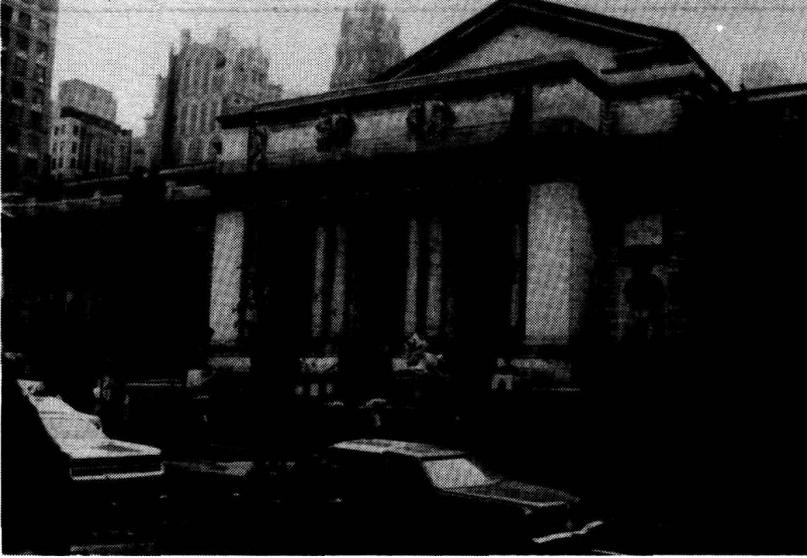
10月8日中秋、午後6時45分、PANAM800便は、私の硬直した無感動さをよそに、夕闇の羽田空港を、滑らかに飛び立った。この便は、ニューヨーク直行で、乗客の大半は、米国人で占められていた。調査団は、私の他、鎌倉市立の鹿兒島館長、北上市立の滝沢館長、そして、気仙沼市立の荒木副館長の、計4名であった。4人共に、事前の打ち合わせで、2回程、短時間にあっただけだから、面識はほとんどないと云えた。不安は一層拡散した。

言語環境のちがいは、歴然と現われるものだ。スチュワーデスが満面えみをうかべて語りかけて来たとき、一瞬、戸惑ってしまい、何を言われているのか判らない有様であった。旅立ちのまえ、高卒後、中南米を蛮勇をもって放浪し、最後は米国の或る大学を卒業した、したたか者の義弟に、英会話の特訓を受けたことなど、どこかに吹き飛んでしまい、そこにあるのは、無能で赤裸な私自

身であった。聞き返すと、「コーヒーか茶か」と問うているだけではないか。初めにしてこの始末、この先どうなることか。真の教育効果は、数拾年たって、はじめて現われると聞く。私の受けた英語教育の成果が、今になって開示されたと云うべきか。「世の教師よ、心せよ」と、私はいいたかった。そこえいくと、戦前の教育をうけられた、3人の諸先輩は、立派の一語に尽きた。これくらい的事では、微動だにしないのである。特に、北上市の滝沢団長は、「黙して語らず、人をして語らしめる」であって、後部座席の米国籍日本女性を急場の通訳として採用したのであった。立ちふる舞の美事さは、積年の経験と人格のなせる業か。とまれ、このような事が機縁となって、心の高ぶりも融けていったのであった。

羽田を離陸して、時はどれ程たったのであろうか。機は翼に残照をうけ、夕闇せまるケネディー空港に着陸した。同日の午後6時50分であった。安堵感が全身を流れる。空港には、国会図書館からコロンビア大学図書館に研修生として派遣されている、大滝則忠氏と奥様が出迎えてくださっていた。

翌朝からの2日間は、大滝氏の懇切にして機微をとらえた案内で、高層建築が群衆するアメリカ経済の中核、ニューヨーク市街を巡ることとなった。図書館員として、常日頃、痴的労働に従事している私達であったから、当然のことながら、市立図書館をはじめとして、メトロポリタン美術館、自然科学博物館等々、主要な名所はくまなく見学することになった。ハーレムに出向いたときなど、



□ ニューヨーク市立図書館



□ 大滝氏宅で奥様と一緒に

大滝氏が運転する車中だというのに、どうしたと
とか、4人とも無言であった。それは、サイケ調
に塗りたくられた地下鉄に、体験乗車したときも
同じであった。

アメリカのお上りさんに混った駆け巡りであ
ったが、一つだけ、私の意識をとらえた疑問があ
った。大滝氏宅で奥様の手料理とバーボンに酔っ
ていたときも、あまりの喧騒さに、眠られぬまま、
ホテルのベッドに横たわっていたときも、この意
識の彼方からわいてきたような疑問が心に掛っ
ていた。それは、「何故、この国は、世界各国の文

化や文化財を、貪欲なまでに掻き集め、資料とし
て、自国の教育システムに組み込んでしまうのか。
豊富なコレクションの背景に秘そむ、旺盛な収集
欲はどこからきているのか。」云い換えるなら、
「何故、世界史（資）を、特定の空間に凝縮させ、
その姿をがんぜに再現しようとするのか。」とい
うことであった。その量と質は、アメリカの歴史
を、はるかに超えているにちがいがなかった。そし
て、この疑問を解く鍵は、たかだか、建国200年
の歴史そのものにあるのではないかと秘かに考
えたりもした。歴史の欠如感覚、これを充足する

ため、各国の文化や文化財の収集に貪欲となる。果たしてそうであるのか。と、この誇大で先験的な疑問と短兵急な独答も、どこか先見性があり、アメリカの図書館の歴史と無関係でないような気がしてならなかった。そこで、この点について、以降の調査館で、素直に問うてみることにした。

それにしても、ニューヨークの夜は、恐ろしさと面白さが同居しているところだ。モダンで洒脱、ある館長をして、「あなたの英語は正しい。ここは田舎だから、あなたの正統な英語が通じないのだ」と云わしめた程の英語力に富み、顔には酒豪の痕跡を滲ませ、足は軽やかに大地を蹴り進む、鹿児島さんが、街の酒屋でバーボンを買って来た。鹿児島さんと私は、それを2階の滝沢団長の部屋で飲みほし、深夜、18階のそれぞれの自室に帰るべくエレベーターに乗った。するとそこに、若い白人と黒人の2女性が乗っていて、何やら話しかけてきた。鹿児島さんが「私達の部屋で飲みなおさないかと云ってるよ。佐藤さんどうするの」と、私にけしかけるような調子で話す。飲む事は決して嫌いでない私も、とうぜん、ここでは意を決して自室で寝ることにした。メチャクチャな和英語でおことわりしたのである。旅の抒情は、軽薄な冒険心の直接行使より、空想の側に身をゆだねるほうが、はるかに深まると判断したからだし、何よりも安全であるにちがいがなかった。

2. 過密な日程、小さな図書館も見たい

大滝氏から、アメリカ旅行をするに必要な最少の行動様式を教えられた私達一行は、10月11日、首都ワシントンに向け、ケネディー空港を飛び立った。正直、私は疲れていた。それだけに、ワシントン周辺の、淡い秋日をうけて輝く、木々の緑が美しいと思った。

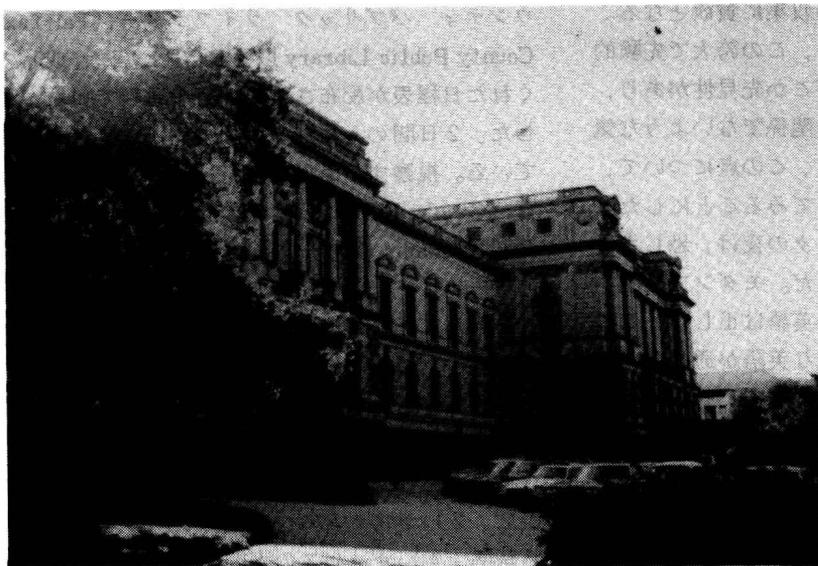
ホテル、ハラディン(Holiday Inn)で休息していると、通訳の岡田信子さんが訪ねてくれた。明日からの調査日程を打ち合せておきたいとのことだった。岡田さんは、メリーランド州社会局で、ケースワーカーをされていると聞く。談笑の後、早速、第1の調査館であるフェアファックスカ

ウンティ パブリック ライブラリー(Fairfax County Public Library以下FCPL)が作成してくれた日程表が配布された。目を通してビックリした。2日間の、私達の行動がピッシリと組まれている。視察する館は10カ所、その間に、郡行政官(County Executive)との会見、キワニズクラブ(Kiwanis Club)の昼食会、夜はホテルで歓迎パーティーという具合で、気が重くなった。それを察してか、岡田さんが、「アメリカでは自分の意志を、はっきり相手に告げたほうがいいですよ」とアドバイス。意をえたりと調整することにした。

私は、自分のメモを持ち出し、1)FCPLの概要 2)システムの行財政 3)システムの経営基準 4)サービスの実態 5)市民と図書館 6)システムの課題 の6領域について、見学や説明をうけることが希望である。特に、サービスを実施するばあいの基準、スタッフマニュアルのようなものがあたら資料としてほしい。また、図書館員や利用者や接触する機会を多くつくってほしい旨を伝えた。滝沢団長は、東北方言特有の言尾に「ス」を混ぜながら、「私は地方の小さな図書館で働いているので、あまり大きく立派な図書館ばかり見せられても、帰ってからの参考にならない。できるだけ、小さな図書館も見たい。」といった。システム発達過程の息吹きが感じられる。或いは、初期の形態を残した館を見たいとする視点は、誰もが懐いていた卒直な気持であった。岡田さんは、館長に善く告げることを約してくれた。

フェアファックス カウンティとはどんなところなのであろうか。渡米前、FCPLの資料が送付されていたので、人口とか管理組織などについては、ある程度把握していたが、地誌や住民の行動様式については未知であった。岡田さんの説明を聞いていると、言葉の端々に、「保守的」で「ケチ」という語がついてまわった。ヴァージニア州の歴史からして保守性は推定できる。が、「ケチ」の真意はどうか。合理に徹すると受けとめればいいのか、不明であった。

仕事をおえた私達は、国務省のメッセージに応じて、ワシントンの観光(Sight Seeing)に出か



□「C」議会図書館
ワシントンにて

けた。足は岡田さんの愛車トヨタバン。久しぶりに日本の男性4人にかこまれた為かハンドルの手元がくるい、ついせんだって、私達が通って来たばかりの道、つまり、ワシントン国際空港まで連れて行かれそうになったりした。ホワイトハウス

周辺を散策しながら、岡田さんは、彼女が米国留学した当時のことを、懐かしそうに語ってくれた。その夜、私達は、明日からの調査が大過なくすゝめられるよう、ホテルのレストランで豪盛な料理をとり痛飲した。ワシントンの夜は静かであった。

SUBJECT : TENTATIVE SCHEDULE FOR JAPANESE LIBRARIANS

Tuesday , October 12

- 9:00 a. m. ○ Orientation by Directors and determination of mission
- 10:30 ○ Tour of Ravensworth, meeting and hearing from Coordinators enroute (five minutes each)
- 11:45 ○ Fairfax Kwanis Club
- 1:30 p. m. ○ Central Library - Fairfax City
- 3:30 ○ Reston Regional Library and Carter Glass Library
- 4:30 × Patrick Henry Library - Vienna → Herndon に変更
- 5:30 ○ Holiday Inn - Fairfax City
- Evening × Fairfax City Council and / or Staff Association Hospitality Pending

Wednesday , October 13

- 8:00 a. m. Fairfax City Holiday Inn
- 8:30 ○ County Executive
- 9:30 ○ George Mason Regional Library - Annandale
- 11:00 ○ Alexandria Public Library
- 12:00 ○ Lunch - Gadsby Tavern , Alexandria
- 1:30 p. m. × Marths Washington , × Richard Byrd , and ○ Kings Park Libraries

凡例 ○印は実施
×印は中止

3. 閑静な立たずまいの図書館管理部

冷気のなかでワシントンの朝はあけた。今日からが調査の本番である。期待と不安のはざままで生気が甦える。みな、清々しい顔立ちである。特に、気仙沼の荒木さんは張り切っていた。人と対して挨拶したり、語り合ったりする時、自身の足元ななめ前に目をおとして、自問自答の語り口を習性とし、かつ物静かで大陸的風貌をされた荒木さんが、「今日はどうも挨拶をさせられそうなので、昨夜2時までかかって、英文案を草していた」と云い、目をしばたいてみせた。一同、その語学力に敬服した。

先づ、FCPLのアドミニストレイティブディビジョン(Administrative Division, 以下管理部)に向けタクシーに乗った。ポートマック川を渡り、右手にアーリントン墓地を眺めながら、西南に向かって木々のおい繁る林の中の道を、約30分くらい走ったであろうか、ハイウェイを左折すると、突如前方の視界に建物が現われた。これが図書館管理部であった。ページ色を基調とした、2階建の閑静な施設であった。秘書のMiss Marie Gozziが笑顔で迎えてくれた。岡田さんも続いて到着した。

「子どもは3人いるが、どうしたことか妻がいない」という、ディレクター(Director, 以下館長) Mr. Whitesides は、40代中頃の方で、実に若々しい。体ぜんたいで歓迎の意を伝えてくれた。日本図書館協会や、私達のプレゼントを渡し終ると、早速、ミーティングにはいり、FCPLの説明を始めた。これ以降、私達は、館長の案内で、図書館管理部の他、7つのブランチ(Branch 以下分館)と、1つのシステム外図書館を、2日間で調査することとなった。

フェアファックス カウンティ(County を以下郡)は、首都ワシントンの郊外に位置している。面積1,033平方キロ、人口574,800('76現在)、

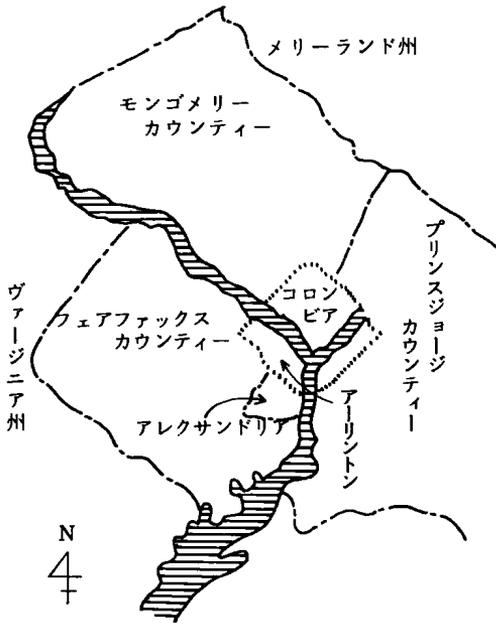
農業が主産業である。面積の3分の2は未開発の地域で占められているが、ワシントン首都圏に組みこまれているので、人口増が近年いちじるしい。知識人が多く住し、ヴァージニア州で1番、政治的潜在能力をもっているといわれている。郡の施策として、最近は、積極的な企業誘致にのりだしているとも聞かされた。

FCPLは、図書館管理部の基に、17の分館を持ち、2台のブックモービル(Book Mobile, 以下自動車文庫)と、2台の連絡専用トラックとで運営されている。図書館の施策は、州の基本法のもとに、州と郡とが一体となって決定される。それに、重要な権能を与えられているのが、図書館理事会である。構成は、フェアファックス市から1名、郡から10名で各議会(議会又は郡理事会)によって選任される。彼等が館長を選び、館長は図書館員を雇用する。図書館予算の98%は、郡の住民からの税金に依拠し、残りの2%が州と連邦政府から支出される。館長に、「ケネディー大統領は、図書館振興に尽力したと聞いたが、今はどうか」と問うと、「ニクソン、フォードは力を入れない」といっていた。

図書館管理部は、直接サービスを展開する、各分館の組織上の中枢として、管理機能をもっている。従って、サービスの企画立案はもとより、資料の収集及び整理、職員の管理と訓練などを集中して行なっている。各サービス部の案内を受けているとき、<関係者外立入禁止>の札が掲示されている所を通りかかった。聞くと、「児童サービスの訓練をしている」といっていた。また、ここには、フィルムライブラリーも設置されている。5つのカウンティと一諸に運営されていて、そのセンターともなっている。

建物も、その内部の諸設備も、簡素そのものであって、業務が滞滞なく行なわれればいいといった印象をうけた。なるほど、岡田さんの語ってい

ワシントン首都圏図



た「ケチ」とは、このことを指しているのか、とも考えてみた。

3) 住民の就業構成比率 (1975年)

ホワイトカラー	160,600 人	76.6 %
専門職/経営者	99,600	47.5
事務職員	45,700	21.8
営業職員	15,300	7.3
ブルーカラー	40,600	19.4
職人	23,000	11.0
工員	6,300	3.0
労働者(除農業)	2,300	1.1
農業者	-	-
サービス業者	8,200	3.9
お手伝い	800	0.4
未報告	8,400	4.0
計	209,600	100

カウンティーの概要 (FAIRFAX COUNTY PROFILEより)

1) 人口の推移

年	人口
1900	18,580
1950	98,557
1960	248,897
1965	329,455
1970	454,275
1976	554,500 (現在)
1985	786,000 (推定)
1992	819,000

2) 教育-就学人口 (1975年)

25才以上の人口	285,200
非就学者	500
小学校	14,200
高等学校 3年制	20,600
” 4年制	74,500
大学 3年制	52,700
” 4年制	114,400
未報告	4,800
中等教育就学卒	13.6 %
高等 ”	84.7 %

(注) ハイスクール以上が高等教育就学卒

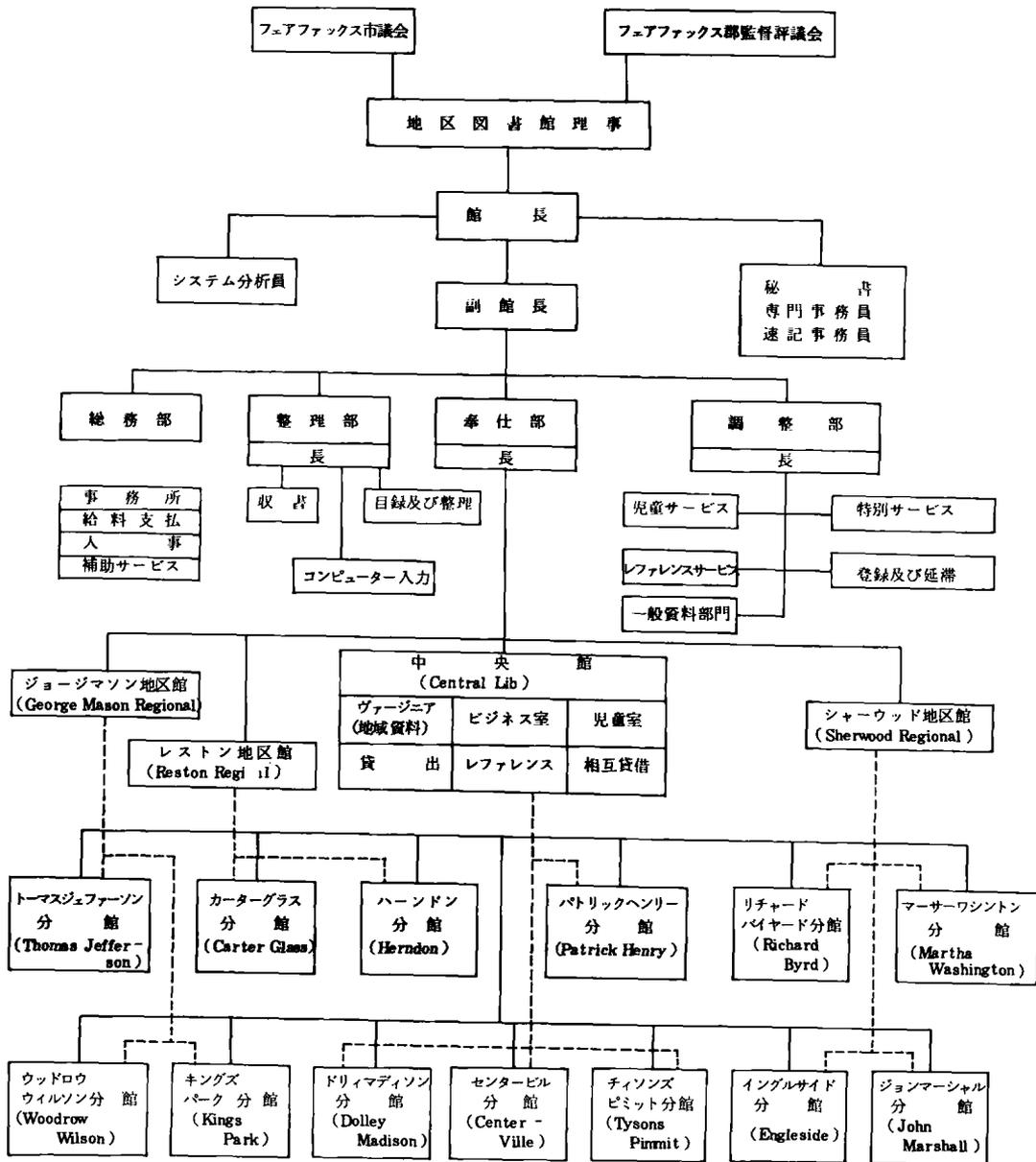
□ 図書館管理部全景



□ 図書館管理部で



FCPL組織図



4. ブランチは人の流れにそって

牧場や常緑樹林が、郡全体をスッポリと覆っていると表現できるくらい緑が多い。黄ばみかけた落葉樹も、秋陽を浴びて輝いている。約60万の人口と聞いたが、市民はどこに住んでいるのだろうか。まるで、夜行動物が、いまは樹林に息を潜めている如く、路傍に静寂がつづいている。市街地の、ほんの一部を除いては、民家がほとんど見あたらないのだ。

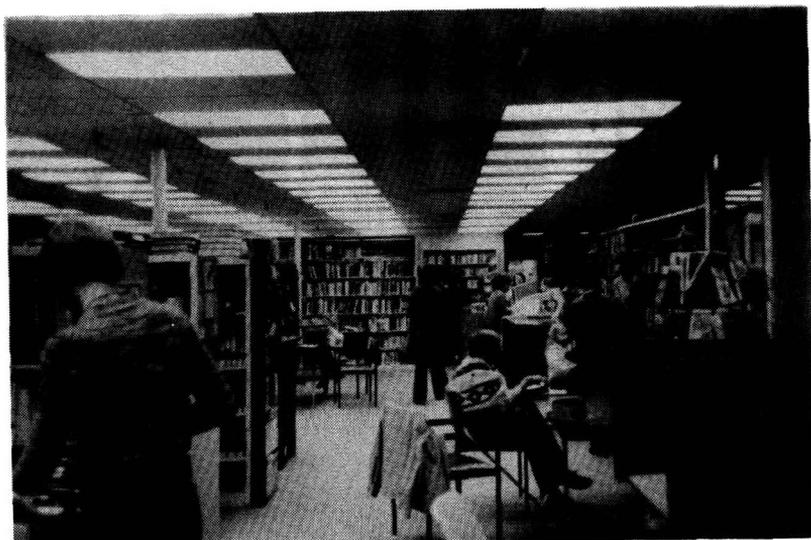
私達が訪問した分館の多くは、森のような林の

ただなかにあった。小アパート群やショッピングセンター、又は公園の一角に建てられていた。独立の施設もあるし、ワンフロアを賃借して開設されている分館もある。大事な点は、その位置が、市民の利用し易い処に設置されていることだ。日本でも図書館設置の条件として、「生活圏域」とか「生活動線」なる概念をもちいて、位置を確定しようとする。が、実際に建てられてみると、あえて市民が利用しないことを望んでいるのかと思える程に、不便な処に建てられたりする。あたり

□ リストン地区館（賃借分館）



□ リストン地区館
その内部

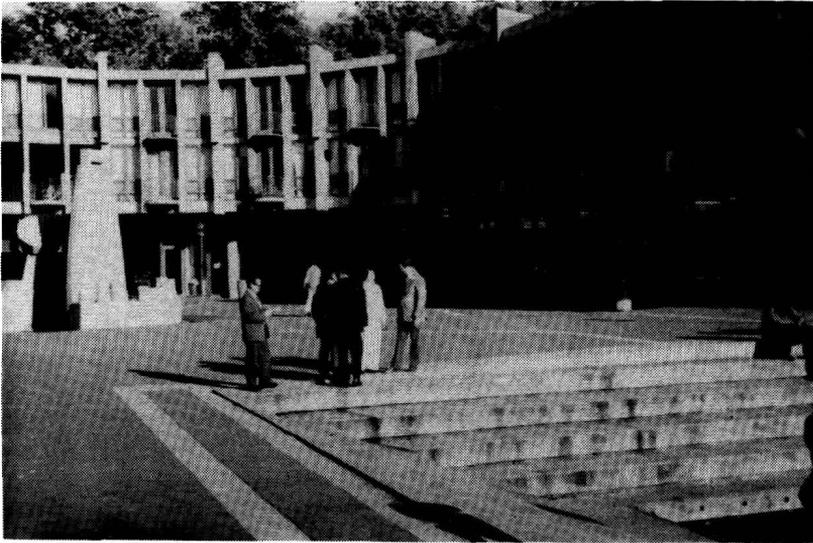


まえのことだが、ここでは、「人の流れにそって」のセオリーどおりであった。

中央館を除いて、すべてワンフロア方式のプランチであったが、地域の状況を反映していて興味深かったのは、賃借の分館である。訪問館の中では、リントン地区図書館(Reston Regional Lib)とカーターグラス図書館(Carter Glass Lib)がそうであった。前者はショッピングセンター内で、面白いことに、隣は書店であった。本屋と共存の分館といえようか。私は知らないで本屋に入ろう

とした。すると館長が「図書館はこっちだ」といったので、はじめて本屋であることを確認した。日本では考えられない。店主が商売の邪魔だと青筋を立て、役所に怒鳴り込むのがおちではないのか。後者は、1階部分が貸店舗、2階がアパートとなっている建物の、1階の一室を借りていた。10人も入ると身動き不能となる位のスペースしかなかった。

館長は、「ワシントンの人口が、カウンティ内に年々流入して来ている。建設業者がプランを



□カーターグラス分館全景
この一階部分の一室を分館として賃借している



□ハンドソン分館
元・婦人クラブがつくった図書館

□ ハーンドン分館その内部



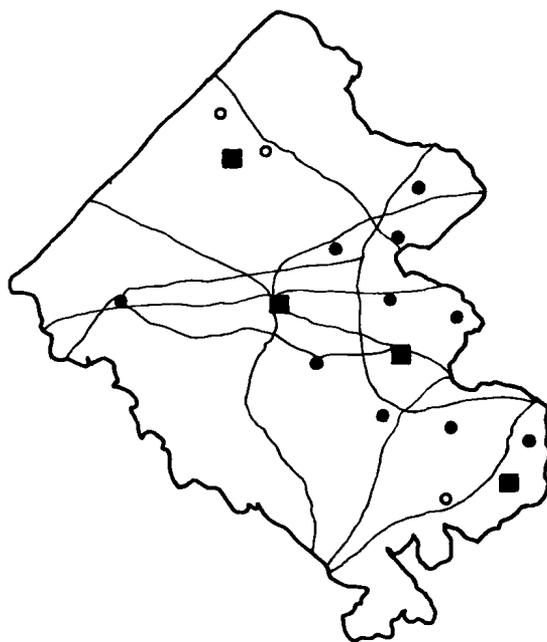
立て売りだと、林の中に街ができる。彼等は、経済的に裕福で、インテリが多い。だから、図書館を要求する。」と云って、賃借の分館ができるわけを説明した。日本でも首都の周辺では、同様の現象が進行しているから、ことさら耳新しいことではない。が、こちらは、人口が増えれば図書館ができる。そして、何と緑と太陽の多いことか。

希望がかなえられ、小さな図書館もみた。ハーンドン図書館(Herndon Fortnightly Lib)である。或る婦人クラブが、60年前に、民家を改造してつくった施設で、4年前に、FCPLに移管されたと聞いた。今様の表現をつかえば、「手づくりの市民図書館」となろうか。20坪位のスペースを、成人、児童、参考に区切り、暖炉も残されていて、家庭的雰囲気か漂っていた。市民の、図書館によせる愛情が強く伝わってくるようで嬉しかった。

私は館長に、「新しく分館を開設するときの基準はあるか。また、住民運動によって設置されることもあるか。」とたずねてみると、その応えは「これといった基準はない。人口や教育程度、あるいは利用度などの実態に応じて計画化する。住民と行政が一体となって建てる。」であった。

昼間は静かであると云ったが、見学の帰路、すさまじい光景におつかった。道中の広いハイウェイも、夕方は、日本と変らぬ交通渋滞なのだ。どこから集まって来たのか、車が延々と列をつくっていた。

ブランチの配置図



- 凡例
- Regional Lib
 - Community Lib
 - Neighborhood Lib
 - 主要道路

ランチの概要

ランチの大きさ による呼称		館 数	週開館 時間	開館時間
大	地区図書館 (Regional Lib)	4	72時間	平日 午前9時～午後9時 日曜 午後1時～午後5時
中	地域図書館 (Community Lib)	10	60時間	土曜 午前9時～午後5時
小	近隣図書館 (Neighborhood Lib)	3	平均 40時間	まちまち (館 の状況による)

5. ブックモービルには融通性を

ブックモービル(Book Mobile)は、施設に対して、機動性、可変性という面ですぐれている。しかし、運営上の工夫がなければ、その特性を發揮することはできない。利用者にとって、自動車文庫は、ある日、ある処の、ある時間帯、しかも、限られた資料積載能力から、狭い選択スペースしかない。それをリクエストで補完したとしても、極めて強い利用上の制約を生む。定置の施設サービスに匹敵する、等価的運営方法が採用されてこそ、利用者は満足するのではあるまいか。それには、次の条件が満たされなければならないと、私は考える。

1) 利用の合理性、効率性が確保できる駐車場 (Bus Stop) の位置と時間帯、2) 貸出しと返却が融通無碍、3) 遅滞ないリクエストの処理、4) 新鮮な資料と、その背後に豊富な資料群が透感できる資料構成、5) 地域の実情にあわせた巡回周期の編成。

一言するなら、「運営上の融通性」こそ、自動車文庫の特性を十全に生かすことになろう。FCPLの場合はどうであろうか。

リストン地区館を訪れた時の説明では、この分館に1台、シャーウッド地区館 (Sherwood Regional Lib) を基地として1台、計2台で、121の駐車場を巡回していると云った。渡されたスケジュール表によると、駐車時間は、最長2時間30分、最短が30分で、平均1時間前後である。又、巡回

時間帯は、11時頃を起点とし、場所によっては、20時までとなる。巡回周期は、月1回と隔週の2通りある。実際の巡回にたずさわる職員は、1台の車に2人で、フォトチャージングを貸出方式として採用している。どのような資料を積載するか聞くと、主に、ポピュラーな本と雑誌で、すべての年齢に応じられるよう構成しているという。また、資料は、基地となる分館と共有で、自動車文庫として、独自の資料はもっていないという。そして、駐車場の設定は、市民の要望による場合と、すべての者が利用しやすい地域で、読書需要が潜在しているところ、ということである。

さて、きめ細かな駐車場の配置のなかで、市民はどのように利用したらよいのだろうか。ひと言でいえば、市民は1度登録手続をし、カードの発行をうければ、そのカードで、どこかの駐車場を利用してよいし、また、返却はどこかの駐車場、分館へでもよい。貸出しと返却の場は、利用者の側に、最大限の自由が保証されている。だが、延滞すると、1月につき10セント延滞料が課せられる。もちろん、リクエストすることもできる。一般的な資料は、巡回の3、4日前に電話で可能だが、特殊な資料は、直接、職員にしなければならない。

日本では考えられない夜間巡回もする。どこかのサービスポイントを利用してよいし、利用した資料は、どこに返却してもよい。これ等の条件が整備されるなら、自動車文庫の利用につきまとう制約は、かなり取り払われることになる。まさに、FCPLは、融通性が運営上に確保されている。もちろん、これが可能なためには、図書館サービスシステムの、一定程度の完結性が前提となろう。

6. システムを結ぶものは

リストン地区館の裏庭で、ブックモービルとは異質のトラックを見た。これは何かと問うと「メッセンジャートラック (Messenger Trucks)」であるという。大型のトラックで、髭をはやしたいかつい男が、ローラーのついた箱型の袋を降して